

# テクノロジーに美学を —伝説となったスティーブ・ジョブズ—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

56歳の若さで早逝したことによってアップルの創業者スティーブ・ジョブズ(1955-2011)のカリスマ性は完成された伝説となった。20代で億万長者となり、時価総額でエクソンモービルを抜いて同社を世界最高の企業に成長させたジョブズはまちがいなくアメリカン・ドリームの実現者だった。だが経営者としての足跡は常に平坦な道をたどってきたわけではない。創業者でありながら一



スティーブ・ジョブズ

度は会社を追放されるという奈落の底も体験している。ジョブズがいかに危機を突破し、不死鳥のように甦り、ナンバーワン企業へと飛躍してきたのか。その波瀾に充ちた軌跡を追ってみよう。

## 起業家としての成功

カリフォルニア州のサンフランシスコで生まれたジョブズの父はシリア人の政治学者、母はアメリカ人の大学院生だった。結婚が認められなかったために半導体産業の聖地となるシリコンバレーの中心地ロスアルトスのジョブズ夫妻に養子とし

て引き取られる。

高校時代にバイト先で後年アップルの共同創業者となり、ハードウェアの魔術師と呼ばれたスティーブ・ウォズニアックと出会う。二人は長距離電話を無料でかけられるブルーボックスという違法装置を開発し、ウォズニアックが通うカリフォルニア大学バークレー校などで売りさばいた。

オレゴン州ポートランドの進歩的アートスクールであるリード・カレッジに進学したジョブズは興味のない必修科目を嫌がって半年で中退する。しかしコーラの空き瓶回収などで生活費を稼ぎながらキャンパスに残り、哲学、宗教、カリグラフィ＝西洋書道など好きなクラスだけ聴講した。のちにアップル製品で活かされる独自の美的感性はこのとき培われる。

実家に戻ったジョブズは1974年、テレビゲーム大手のアタリに入社。その一方で仏教に傾倒し、禅の導師を求めてインド放浪の旅に出る。

1976年、ウォズニアックが開発したパーソナルコンピュータにビジネスチャンスを見いだしたジョブズは実家のガレージでアップル・コンピュータを設立。ちなみに社名はジョブズが熱烈なファンだったビートルズのレコード会社アップルから思いついたといわれている。ジョブズは初の製品をアップルⅠと名づけて販売し、洗練されたフォルムの改良型アップルⅡの爆発的ヒットによってシリコンバレーの起業家を代表するサクセ

ス・ストーリーを築いていく。

## 追放から復活へ

アップルは1980年に株式公開を果たし、大株主のジョブズは2億ドルを超える資産を手に入れた。27歳で世界的なニュース情報誌タイムの表紙を飾るなど一躍時代の寵児となる。

1983年、ジョブズはマーケティング部門を強化するためにペプシコーラ社長のジョン・スカリーをヘッドハントし、マックの愛称で親しまれることになる看板商品マッキントッシュの開発に乗り出す。翌年、マッキントッシュ第1号を発売したものの売れ行きは不調でスカリーとの対立が激化し、熾烈な内部抗争を繰り広げたあげく1985年に解雇される。

ビジネスシーンの頂点から一転してどん底への転落——しかしジョブズの真価はむしろここから全面的に発揮された。アップル株を売却して新会社NeXTを設立し、映画監督・プロデューサーのジョージ・ルーカスの映像制作会社ルーカスフィルムのコンピューター・アニメーション部門を買収。新たにピクサー社を発足させ、トイ・ストーリーなどのCG映画を制作して成功を取めた。

解雇されて約10年経過した1996年、ジョブズは業績不振に陥っていたアップルにNeXTを売却することで復帰し、翌年には暫定CEO(最高経営責任者)に返り咲く。その後もライバルのマイクロソフトとの資本・業務提携や社内のリストラを通じて業績を回復させ、2000年に正式にCEOに就任した。

のちにジョブズはアップルを追放されたときの心境を次のように語っている。

「アップル社に解雇されたことは、私の人生で起こった最良の出来事だったと後に分かった。成功者であることの重さが、ふたたび創始者になることの身軽さに置き換わったのだ。何事につけても不確かさは増したが、私は解放され、人生の中でもっとも創造的な時期を迎えた」(YouTube『スティーブ・ジョブズ名言集』)

解雇されたことを「私の人生で起こった最良の出来事」と断言し、ふたたび「創始者になることの身軽さ」を欲ぶジョブズは根っからのファイターであり、クリエイターであり、チャレンジャーだったといっていだらう。

## 新たなデジタルライフを創造

アップルはジョブズの次のような考えに基づいて再生する。

「アップル社再建の妙薬は費用を削減することではない。現在の苦境から抜け出す斬新な方法を生み出すことだ」

この結果、アップルは消費者のデジタルライフを一新する巨大な成果を上げることになる。ジョブズの陣頭指揮でメディアプレーヤーiPod、音楽配信サービスiTune、多機能携帯端末iPhone、タブレット型コンピューターiPadと時代の最先端を走るデジタル商品を続々とリリースする。

これらが圧倒的に支持されたのは高度な機能性をそなえていたことにとどまらない。複雑な電子テクノロジーをシンプルで美しいデザインに変換することに成功したからだ。マッキントッシュの開発に際してもジョブズは基板パターンが美しくないと何度も設計をやり直させている。

テクノロジーにシンプルな美学を追求したのはヒッピー、ロック、東洋哲学など既存の体制的な文化に対抗するカウンターカルチャー＝対抗文化に強い影響を受けたジョブズならではの独創的な発想だった。いわばテクノロジーとアートの統一、消費者の心理を根底から揺さぶるテクノロジーのアート化を実現した。

華やかな業績の一方でジョブズは不治の病魔に冒される。2004年に膵臓がんの手術を受けたジョブズは長い闘病生活を経て2011年8月に健康上の理由でCEOを辞任、10月に息を引き取った。

生前「墓場で一番の金持ちになることは私には重要ではない。夜眠るとき、われわれは素晴らしいことをしたと言えること、それが重要だ」という言葉を遺して――。